

## ヤマトシジミの現存量調査① (現存量調査とは①)

ヤマトシジミは、青森県では太平洋側中央部に位置する小川原湖（面積 62.2km<sup>2</sup>）と日本海側津軽半島北部にある十三湖（面積 18.1km<sup>2</sup>）で漁獲され、年間にそれぞれの湖から 1,000 トンから 2,000 トンの水揚げがあります（2020 年時点）。

内水面研究所では、2002 年（平成 14 年）から小川原湖と十三湖のヤマトシジミ現存量調査を始めました。現存量とは、調査した時期にどのぐらいの量のシジミがそれぞれの湖に存在するかを推定するもので、資源量とも言います。現存量の言葉を使う場合には、調査時点に存在したシジミというイメージが強くなると感じています。

この現存量調査では、エクマンバージ採泥器を使います。この採泥器は 15×15cm=225cm<sup>2</sup>の面積、深さ 3~5cm の湖底の底質を船上から採取することができます。各調査地点では採泥器を使い 2 回サンプルを採取し、目合 1mm のフルイにかけて残ったシジミをサンプルとします。シジミのサンプルは、研究所に持ち帰り小石や藻などの中からシジミを拾い出し、全てのシジミの殻長を測定し、殻長 18.5mm 以上の漁獲サイズのシジミと漁獲サイズ未満のシジミの合計重量を記録しました。

小川原湖の調査範囲は、調査を開始した 2002 年時点でシジミの生息水深は 10m 程度までであったことから水深 10m 以浅とし、湖をイカト、セモダ、三沢灘、船ヶ沢前、タカトリ島口の 6 区画に分けて、それぞれ 14~15 ヶ所の調査地点を設けました（右下図）。

十三湖の現存量調査は、十三湖の水深最大水深が 2m 程度と浅いため全域を調査対象とし、別の調査で使っていた調査地点 1~16 に加えて、湖全面に均等に配置するように新たに調査地点 A~F を設けました（左下図）。

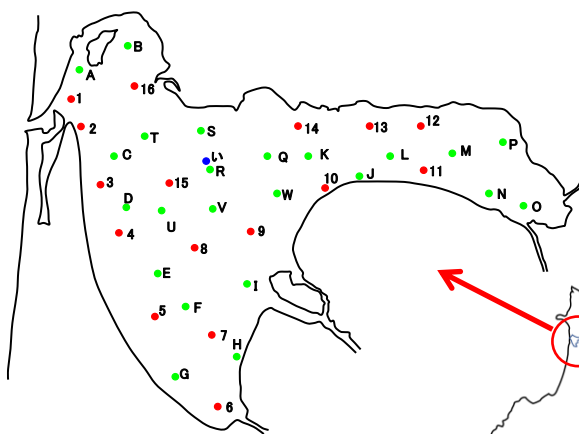
小川原湖の調査は毎年 8 月下旬に、また十三湖は 8 月上旬に行っており、現在（2021 年）まで続いています。年に一度の棚卸、在庫チェックのようなものと考えるとわかりやすいかもしれません。



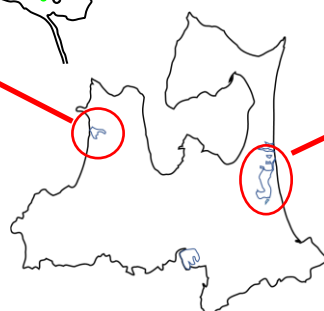
エクマンバージ採泥器



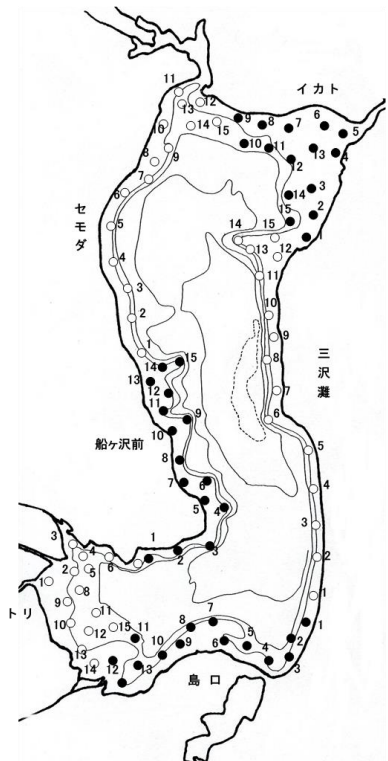
ヤマトシジミの殻長



十三湖の現存量調査地点



青森県



小川原湖の現存量調査地点